患者が変われば 医療が変わる
医療が変われば 地域が変わる

島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの㈱フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、Iターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される（ガイアの夜明けで放映）。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第43回 がん教育 その② いのちの授業

患者・学生が双方に学ぶ

2017年10月、出雲市にて開催された島根県がん教育外部講師養成研修に参加してきた。教職員、看護師、市職員、がん患者など多職種の参加だった。

講師はNPO法人がんサポートかごしま理事長三好綾氏。がんサバイバー仲間のひとりだ。「外部講師に望まれること、気をつけねばならないこと」について講義があった。

第1部は国のがん対策推進基本計画の概要、具体的ながん授業の準備と進行など詳細な説明。

第2部はワークショップ。4名をグループとしてディスカッションしたが、多職種の方が混ざることが話題を豊かにすると思うと初対面の方との組みあわせなど工夫してほしかった。

そんな折ある学校からいのちの授業の依頼があった。数年前から小中学校で話しをしているが最近とくに話しにくくなってきた感じがする。身の回りにあまりにがん患者が多く発言に気をつけてほしいとの申し出が多いからだ。話しをするにあたり自分が体験したことを整理してみた。

- 病名
- 告知時期
- 治療方法
- 廻りのサポートについて
- 良かったこと、しんどかったこと
- 子供たちに伝えたいこと

こんなことを振りかえって見た。すると見えて来たことは「生きかた上手かどうか、今をどう生きるか」。誰でも病気のひとつやふたつはある。その病気に如何に正面から向き合いその人らしく生ききるかであろう。さらに「時間の大切さ」が身に迫ってくる。2度とないこの時間を如何に過ごすかを身をもって体験することになる。

私が大阪で入院していた際、妻と娘は「お父さん、あとそう長くないかもね」といっていたがその妻が先に逝ってしまったのを思い出した。人生は無情なものだ。何時お迎えが来るかは分らないが今を懸命に生きることが出来れば幸せなのだ。

前号にも書いたが看護学生との「がんサロン見学」を通じての関わりは患者からは知恵を授け、学生からは生きる気を貰い、双方が大きな学びの場となっている。